

瀧のある風景(菅平唐澤の瀧)

上田市三井写真館撮影

泥を吐く

栗柄超

僕は謡曲をやりました。
とは、大きな聲では言へませんが、やつた事は事実です。
やり始めたのは僕達が東京の屋根裏に住みかけて三年目の事でした。
では一番やつて見ろ
と仰言つてもそれは出来ません。忘れたのでは無いのです。到頭覚えなない内にやめてしまつたからなのです。
その頃、高橋君や植村君等が謡曲を始めようと云ふので、色々苦心してクラブのようなものをつくりました。
メンバーは二十人程もありました。
先生も一緒だつたし色々な點からあのクラブは羽衣會の傍系みたいなものでした。
高橋と云ふ老先生が教へて呉れたので

す。老先生はどうも言葉がはつきりしないのでみんな困りました。何を言はれるのかさつぱり譯らないのです。やはり寄る年波のせいだつたのでせう。
ところが謡曲の聲になると丸で別人のやうでした。稽古と云ふものはすばらしいものです。
ゆつたりとしてゐて美しく正しい節廻しで界限に閉えてゐました。
僕達は月に二日か、多くても三日位は稽古をつけて教はりに行きました。
稽古はあの稽古の二階でやりました。あの稽古は先生の定宿で、松尾町の鯛焼屋の横の川に沿つて東に入つた處にある旅館なのです。
いつも富山の薬賣りや江戸から来たましたと云ふ浅草海苔を背負つた旅から旅の商人が草鞋を脱いでゐました。
蒸し暑い夏の宵など稽古の途中で眠くなる事も幾度かありました。
僕達はそんな時には

「お蠶に桑を呉れて来ます」とか何んとかうまつて事を言つては香青軒でビールを飲んでゐました。
心掛の悪い事しては腹をこらした。
謡は腹をつくる



毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵税共五十錢)

編輯所 發行所 印刷所
和清山香 校學門絲野 校學門絲野 校學門絲野
校學門絲野 校學門絲野 校學門絲野

「お蠶に桑を呉れて来ます」とか何んとかうまつて事を言つては香青軒でビールを飲んでゐました。
心掛の悪い事しては腹をこらした。
謡は腹をつくる

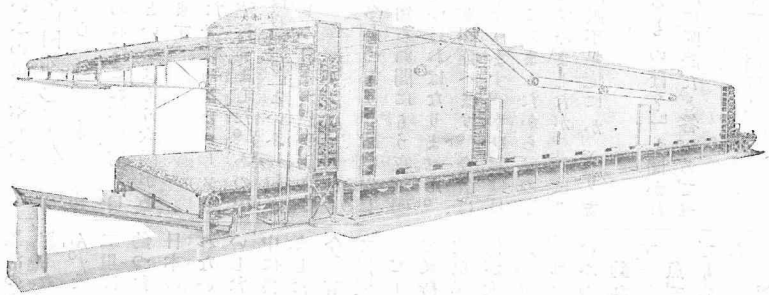
には最も妙だとききました。腹をこらへるものは握飯ばかりではありません。さ、それからどれ程経ちましたか、一人減り、二人去つてあのクラブも羽衣會のおゆるしを待たないで消えちまつたのです。お腹の出来ないうちにやめてしまつたのでした。
僕などあの時にお腹を拵へなかつたのでそればかりが惜しいやうな氣がしてゐます。
ほんとに、機会でしたのに、惜しい事でした。
機会とは後側の禿げた頭のやうなものださうです。
向ふから来る時は前髪をとつ掴まへる事が出来ませんが、一たび好い機会を失ふ時はたとへそれに追ひ付いたとしても、とても掴む事は出来ないのださうです。
今の場合もう一度僕が謡曲で腹をつくらうとあせつてもつる／＼つてもう駄目です。
謡曲のあの澁い重々しい感じは到底僕達がモノにする事は出来ませんでした。たとへ節廻しを覚えてしまつてもそれはお胸の下から湧き出る朗音ではないのです。のど佛の近所から出て来る黄色い聲でしかありません。苦しきまぎれに叫ぶ悲鳴のやうなものでした。
それにしても、今の學生諸君の中には謡曲のやうな高尙な餘技を持つてゐる人があるやうにせうか。

門に入れば蘇鉄に關のかほり哉。
この家の主人の風流がおもはれます。
此の、ヶ月ほど北浦を國境附近迄歩いて来ましたが、
或る處では村の小學校の生徒が迎へて呉れました。
子供達が手にしてゐた日の丸の小旗には「歓迎」と達筆に墨書してありました。
匪賊に拉致された事があると云ふ紅顔の少年に匪賊の生活状態をききました。
阿片中毒患者も幾人か僕達の目に觸れました。蒼白い顔をして、ぼんやりしてゐました。
僕達が乗り捨てた自動車は縣城へ歸る途中に匪隊を受けたさうです。あとで聞いて驚きました。
満家と云ふ處では、僕達の行つた前夜襲撃されたとき、
警察署の庭に戦死した警官の屍が置いてありました。

てありました。
薬人形のやうな警備の兵隊と腰の拳銃がたのみなものでした。
眼薬を持つてゐた爲にすつかり醫者にされてしまつて當惑しました。
「君あれは婦人病だよ」
「アスピリンだから大丈夫。毒にならなければいゝではないか」
料簡子の焼鍋(酒屋)に一夜を明した僕達は阿什河に向ふ途中丘を越え畑を横切つて進みました。
馬の上でこんな話をして満鐵のA氏等と朗かに笑つた事でした。
朝から出して貰つたパイチュウの一杯が僕達を元氣付けた譯でした。
この便りが皆様のお目にとまる頃は僕はまた高梁と包米の伸びてゐる曠野に馬を進めてゐる事です。

葉月朝

現代乾蘭機界ノ王座
大和式自動輸送乾蘭機



二五九六年代表型

製作發賣元

株式會社

大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目

特許大和式自動輸送乾蘭機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川式光乾機
特許やまざき式ホーロー乾燥機
特許サンコー式濾過淨水装置
特許サンコー式廢湯吸熱器
特許サンコー式高壓ポンプ
特許サンコー式トランプ

史汀餘稿

在名古屋 草野史郎

北滿詩行 (其の二)

私は千曲時報で、燕氏の名前はよく承知してゐました。といふのは氏の筆名が「俗してゐるのに惚れこんでゐたから」です。然し私はその燕氏が誰であるかを知らずしてゐました。

熊岳城の湯川兄弟の家で安孫子、池田兩君を併せて四人で話してゐた時湯川兄に「滿洲支會に燕といふすばらしく筆の立つ男が居るが、あやうや誰だか」といふのでした。すると湯川兄は「こゝに居るよ」といふのです。それは池田君だつたのです。正五郎の燕をとつたのださうです。

私はそれを見たとすぐ頭に「キヤラバント・ウエント・オン……」とあつた中學のリーダーを思い出しました。

乗つた人も乗せた馬も、香気さう

私は悠然とやつて來ましたけれども少しは、おかしな所があるんです。それは前に申上げた詩情俳味に、外私の道樂である考古學の資料を蒐める點です。チ、ハルで相當探したんですけど、やはりもう駄目ですね。いゝと教へられ城内に入りました。そして喇嘛僧の通譯で探したんですが、タイした收穫はありませんでした。たゞ馬占山追撃の新しい戦跡を見せられたのでした。

ハイラル、マンチュリーは官憲が厳しく面倒で何にも得る所はありませんでした。たゞ無駄な金を使つただけでした。ラマ僧が馬占山の語する面白さ

その昔鴨綠江を渡つた時「廣いナア」と驚きました。その頃は總てが珍しく、總てが感傷的に若い私の胸に響くのでした。ところが北滿へ來てみると廣さに於てそれ等は比較になりません。本線の四平街から駁れてチ、ハル行の平齊線に乗りますと始めの間は廣い年らも平地林(?)が所々に見えますからまだいゝんですが、鄭家屯以北はそれも見えません。チ、ハル以北は何にもありません。全く一本ないのです。全く平坦で起伏もない廣々たる草原です。二日も三日も汽車は葛進を續けますが何にもありません。全く文字通りの曠野です。野も山も一筆に塗りけり

松に鶴龜！日本では御芽出度い限りです。ところが支那(特に南支)では龜を嫌ふことは誰でも知つてゐます。松はドウでせう？之は墓場の標です。松の植ゑであるところには必ず土饅頭が置かれます。墓なんです。彼等は庭には決して松を植ゑません。之と同じやうな國情や民情の相違は他にいくつもありました。外交上には勿論のこと、總てに氣をつけねばならぬことだと思ひました。

及ばぬ情景です。

飛ぶ鶴の群と汽車とが文字

駱駝は外蒙古と熱河(承德)の名物ださうですが内蒙古でも見えますね。あの背に乗つた悠長な態度、長い首を前後にふりながら歩む姿！全く異國に來た氣分がします。

私はそれを見た時すぐ頭に「キヤラバント・ウエント・オン……」とあつた中學のリーダーを思い出しました。

乗つた人も乗せた馬も、香気さう

私は悠然とやつて來ましたけれども少しは、おかしな所があるんです。それは前に申上げた詩情俳味に、外私の道樂である考古學の資料を蒐める點です。チ、ハルで相當探したんですけど、やはりもう駄目ですね。いゝと教へられ城内に入りました。そして喇嘛僧の通譯で探したんですが、タイした收穫はありませんでした。たゞ馬占山追撃の新しい戦跡を見せられたのでした。

ハイラル、マンチュリーは官憲が厳しく面倒で何にも得る所はありませんでした。たゞ無駄な金を使つただけでした。ラマ僧が馬占山の語する面白さ

その昔鴨綠江を渡つた時「廣いナア」と驚きました。その頃は總てが珍しく、總てが感傷的に若い私の胸に響くのでした。ところが北滿へ來てみると廣さに於てそれ等は比較になりません。本線の四平街から駁れてチ、ハル行の平齊線に乗りますと始めの間は廣い年らも平地林(?)が所々に見えますからまだいゝんですが、鄭家屯以北はそれも見えません。チ、ハル以北は何にもありません。全く一本ないのです。全く平坦で起伏もない廣々たる草原です。二日も三日も汽車は葛進を續けますが何にもありません。全く文字通りの曠野です。野も山も一筆に塗りけり

地上には何にもなく、單調な風景で荒涼そのもので、空はともいふてすよー雲の變化がね。

刻々變り行く雲の形と色！特に夕陽の西に沈む頃！眞紅の太陽！それに映える雲の變化！何んともいへませんね。拙い

私の筆ではとても表はすことが出来ません。これも日本では見られぬ情景の一つです。

夕陽沈む頃雲躍る曠野哉

ペイアンから北黑線に乗換へ國境に向ひます。そして五時間ばかり走りまゐると白樺の平地林が見えます。その時の氣持ちは、驚きやあせまを感ぜません。今迄何にも見えない荒んだ旅を續けた所へ眞白な肌をみせた白樺なんです。御想像下さい。(信州高原で見るやうなドス黒い白樺とは違ひ、雪のやうに眞白な肌です。)

白樺の乙女の肌に蘇る

汽車は向も葛進を續けます。境界の果、原と空との境に、顔色をしたものが薄ぼんやり見えて來ました。その續きが有名な興安嶺なんです。眼の外に微かに消ゆる興安嶺

龍江省と黑河省との境に在る孫吳といふ縣から列車の窓のカーテンを警備兵が全部締めます。その理由ですか？夫は……イヤ替くのを憚ります。注意を受けますからね。兎も角外を見させない爲です。

列車に次のやうな憲兵隊長の佈告が掲げてあります。

一、何人ト雖モ滿洲以北ノ寫眞撮影並模寫ヲ禁ズ
一、孫吳環境間ニ於テ列車ノ窓ヨリ外部ノ展望故ナク乗降口ニ佇立スルコトヲ禁ズ
右違反セシ者ハ嚴罰ニ處ス
昭和十一年四月一日
黑河日本憲兵隊長

佈告

一、清溪以北無論何人對於攝影並圖畫一概禁止
二、孫吳環境間不准自列車窓戶向外窺視或乘降口處隨便展望
前項規程如敢違反時嚴懲重辦
眞書中かうされては憂鬱ですね。
カーテンを締めたる車内のお静けさ

黑河は滿洲國最北端に在る黑河省の首

都て軍事上最も重要な所です。黒龍江を距て、對岸の蘇聯、極東黒龍州の州都ラゴエースチエンスクとは其の間僅か六百里です。一葉帯水、向ふは赤い國です。僅か六百里です。朝夕のコーラスが手にとるやうに聞えます。夕方馬を河に連れて來てゐるのも手にとるやうに見えます。

熊岳城で「コーラスが聞える」といふ話を聞いた時「そんな馬鹿な」と一笑に附し信用しなかつたのでしたが、かうまで近いとは思はなかつたので、——實際來て見て驚きました。

それだけ近い所で相對峙して「今かく」と鎗を削つてゐるのですからね。全く無氣味です。

河一つ隔て、向ふは赤い國

此處國境黒河は緯度からいへば樺太の北端よりまだ北に位してゐます。ですから日本内地と大變違ひますね。

まだ五月の末だといふのに日が長いんですよ。夜の八時(日本時間九時)にまだ太陽が見えます。それから一時近くまで薄暮が續きます。夏であればこれが特有の白夜です。朝は三時といへばもう太陽があかく昇つてゐます。

私が上田へ入つた當時「カチューシャの唄」といふのが流行りました。あの中に「西は夕やけ東は夜明け」といふ一句があります。がシベリヤの白夜が思ひ出され

ます。晩酌の量が少し多かつたり、話が少し長くなつた時には知らぬ間にもう夜が明けるのです。氣をつけねばなりません。(呵々)その爲に日を間違へます。今日は何日だか判らなくなりました。幸ひ私は日を表す時計を持つてゐましたから其の不便や間違はなくすみました。何にしろ夜が短い爲に睡眠不足症にかゝります。

「滿洲で不足するものは？」と聞かれ

ましたら私は即座に睡眠だと答へるでせう。

徳利の數少くて夜明け哉

時間と思ひ出しました。滿洲國では一

日が十二時間制でなく、二十四時間制です。即ち午前、午後の別がなく午後二時は十四時なんです。日本でも否世界で中候所關係のものは二十四時間制を使つてゐますが慣れないと不便ですね。汽車の出るのが十七時五十分なんて、十二時をひいて初めて午後五時五十分だといふことが頭に浮ぶのです。

十三時十四時はまだ判りますが、二十三時二十四時と突然いはれたときは夜半のことだが無間のことだが一寸見當がつかないのです。私は「よほど頭の悪い男」といふことを自覺して恥しくなりました。

二十時を過ぎて猶とる夕餉哉

英雄開日月あり、といふわけではないのですが私は黒龍江に釣を垂れて一日の閑を得ました。それは名古屋から熊持参した釣竿で垂れたんですから興は又入ります。

黒河の街から馬車に乗つて廣い野つ原の路もない所を——曠野には道がありません。そこを平氣で馬車を走らせませう。二里ばかり行つて適當と教へられた所で釣つたのでしたが、そこは流れが強くて日本のシラハヤのやうな小さいしか釣れないんです。一時間はかり續つてもたいた獲物があります。その中に河の中に投げ込んで置いたビールが相當冷えてましたので之を釣上げました。黒龍江の今(五月二十二日)は流水が終つたばかりで、褐色の冷たい水が流れてゐます。

ビールを飲んで喝を嚙み其處を引上げて又待たせて置いた馬車に乗つて今度は波止場へ行きました。そこには大人や子供が大勢釣つてゐます。それはみんな満人かロシア人がさなくばそれ等の合の子です。私をみて「へんな顔をして何んだかいふのですか？」と私には通じません。釣れる！釣れる！上るに忙しい位です。

魚でさへも馬鹿なんです。然しこゝでもあまり大きなものは釣れません。黒龍を釣るに小さくし俺が針

(つゝく)

(配屬將校谷中佐檢閱済)

黒龍を釣るに小さくし俺が針

Introduction

納涼電車増發 上田溫電では七月十五日より九月三十日迄西丸子線以外に左記夏季納涼最終電車増發を行ふ。

△上田發眞田行十時十分△眞田發十時
九分△傍陽發十時十分△上田發別所行

拜啓
時下愈御清適之段奉慶賀候

偕て御承知の如く早川先生は母校創立日尙淺き大正元年九月御就任以來
 實に二十有餘年の久しきに亘り内に於ては母校の爲め將又子弟教養の爲
 めに全力を傾けて御盡瘁下され、出ては著書に、研究發表に或は教化に
 ご斯界の爲め裨益せられしご洵に大なるもの有之吾々會員一同感謝に
 不堪所に御座候
 然るに先般郷黨官民の懇望默し難く推されて産業組合群馬社々長に御榮
 轉せられ、既に新任地へ御赴任被遊候
 就ては此の際先生の御功績を讃え且多年の勞に酬いん爲め資金を募集し
 記念品を贈呈致し聊か感謝の微意を捧け度く候間左記要項御諒承相成御
 贊同の上御醸金被成下度此段御依頼旁々得貴意候
 敬具

一、鑄出金額御隨意

一、申込期限 本年十月末日迄
一、送金先 上田蠶絲専門學校内 蒲生俊興宛

一、受領證 千曲時報に掲載し受領證に代ふ
一、贈呈式 第九回代議員會の際舉行の豫定
一、記念品の選定等は發起人に御一任相成度

昭和十一年八月

(五十音順)

飯山正胤	猪坂直一	荻原清治	川船卓爾
香山清和	窪田圭潤	倉澤美德	小林繁
齋藤菊雄	須田圭二	中澤忠	小澤勝也
永田平	野口新太郎	林貞三	平澤
松村季美	山口定次郎		

七月十七日から上田、上山田温泉間を峠發し毎日午前六時四十分から午後六時四十分迄四十分毎に十九回運轉を行ふ事となるが從來の十三回に比し大増發である。(※印は冬季休、△印は坂城發で屋代篠之井方面に連絡、全部温泉にて長野、八幡、娘捨行バスに連絡)

午前六、四〇 六七、二〇 八、〇
 〇〇 八九、二〇 一〇、〇〇 一〇、
 四〇 一一、二〇 一二、〇〇
 午後〇、四〇 一三、二〇 二、〇〇
 二、四〇 一三、二〇 四、〇〇
 四、四〇 一五、二〇 六、〇〇 ※
 六、四〇

石井鶴三氏が上田獅子を畫く 春陽會
 の巨匠石井鶴三畫伯は七月十九日午前五
 時半來田兼ねての宿望であつた「房山獅子」
 を描く爲めに折柄の祇園祭に出揃つた房

山獅子を上田神社及び彌榮神社の二ヶ所に於て午前十時より十二時に亘つて前後左右より仔細にスケッチされ終つて午後一時より太郎山に登られ午後八時宿所觀水亭へ歸り五日間の豫定で獅子に關する知識を究められ廿三日午後十時廿七分上田發にて歸京された。

今回のスケッチは今春描かれた「常田獅子」と半双宛にし高さ五尺六枚折の屏風に日本畫として收められた筈で上田城三百六十年築城の歴史を誇る房山、常田兩獅子は麗しく畫面に躍つて來春の春陽展に出品されその傳統を全國に誇るに到るであらう。

尙今春描いた常田獅子は諸伯が母校創立廿五周年祭に際し校長肖像製作の折圖らずも見物して製作欲に驅られ常田區へ交渉した處かつて寫眞にした事はあるが書にした事はないと一應は謝絶されたが諸伯の熱望は針線校長を動かし再交渉絶体置却しない約束の下に描かれたものであると云ふ。

上小の夏蠶々況　上田蠶取支所調査の管内七月廿五日現在の夏蠶々況は桑は掃管當時軟弱であつたが好天に依り充實し雨量の少い憂ひはあるが蠶兒の營養には適當、價格は全芽百貫廿一二圓なるも取引は少い。山間部は幾分不足だが全体には心配ない。蠶兒は十二、三日掃の大並は四齡一二日目で發育良好、掃足量は前年と大差なく蠶種家は早口では羨し、大並は四齡、晚口は二齡である。製造繭検査は八月五日より十日頃が全盛で蠶種の賣行は生産減の爲め良好である。

然して當地夏蠶は發育期に入つて連日九十度の高温と大雨後多濕の爲め全般的

に發育が刺激され各所に三眠蠶が發生し今年の新品種日一×支一〇七の關係もあり特に發生が多い様である。

菅平バス増發 上田温電では七月廿五日から當分の内菅平口發菅平行のバス運轉を左の如く行ふが午後二時三十分發は高原列車に接續せしめて今年から増發せらるゝものである。

午前七時四十分 八時四十分 十時三十分 正午十二時(不定期) 午後一時四十分 二時三十分 三時五十分 四時三十分

營平派出所開設 上田警務署では夏の營平取締の爲め七月八日より營平派出所を開設警官一名を交代で出服させる事となつた。

上田の春蠶取引五万圓の増收 六月廿二日から春蠶取引開市せる市内上田、信濃兩郡は上田が一日、信濃が二日を以て爲替取引となり、上田の爲替は同行

て各々附ししが今春八千八百六十貫で前年比では特約取引の急増其他の新規取引の擡頭にもめげず二千六百四十三貫の約六割減じたのみで夏秋兩取引の成行は兎も角春蘭市場は充分な働きを見せてある數量の減に反し實當り相場が平均五圓台で前年より一圓五十錢上の高値となり總價格は廿一万五千五百四圓増で前年比三割一分六厘の五万八千八百七圓増となつて農家は相當に潤ひ各方面に藹高景氣となつて現れてゐる。兩市場別左の如し。

(括弧内前年比)

△信濃 數量二万七千七百六十五貫
(二千二百五十三貫減)價格十五万七千七百圓
(三万五千四百四十圓増)單價五圓四十三

錢(圓五十八錢高)期間六月廿二日
 七月二日(六月二十一日七月三日)
 △上田 數量一萬二千二百二貫(三百
 九十三貫減)價格六萬四千八百八圓(一
 萬六千六百七十七圓增)單價五圓卅五
 錢(一圓六十錢高)期間六月廿二日一七
 月一日(六月十九日七月三日)
 新鹿澤にキャンパ場新設 新鹿澤温泉
 旅館組合では發展の一策としてキャンパ
 ー場を新設し、主として夏季の避暑地

ていふ事だ。さて、湯川村の山に掘り出した温泉を、湯川村の湯屋にかけ流して、湯泉から湯屋へを渡り、村の上の山側園に有採草地二町五反の貸下げを受け、理想的キャンパスを建設する、事になり四地区に分ち各々に便所を設置、飲用又は湯屋の上流より良質のものを引水し土地は殆んど草原で排水は非常によく温泉に近いので期待多くグラウンド運動器具も併設置する。尚上田温泉では同所に案内所を設け、この連絡を期すると云ふが將來では管平の明神澤に劣らない素晴らしいキャンプ場となるであらう。

別所温泉の納涼デー 湯の町別所温泉では八月の中納涼デーとして左の如き各種の催しを行ふ事となつたが早くも非常な人気を呼んでゐる。

△六日夕より観音堂内及湯泉街て七夕祭
飾立競技
△九日は北向匠除親世音四万六千日緣日
のりんご祭
△十二日午後七時より愛宕池にて納涼子
供花火大會
△十四、五兩日は小唄節及盆踊の夕を午
後七時より観音堂内で行ひ別所藝妓總

出動飛入も歓迎
△十八日は別所劇場にて藝妓連温習會
△二十日は納涼子供花火大會を七時より
愛宕池で開く
上田の觀光と温泉招待券附聯合夏季李大賣出し 上田商工會議所では萬高景氣を
狙ひ全市商店(寫眞館、飲食店、カフェ
等)も含む。卸賣、特價品、見切品は除
外)を一丸として「觀光と温泉招待券付
聯合夏季李大賣出し」と云ふ珍無類の方法
を發表した。その方法は七月十日から八
月三十一日まで現金一圓の買上(二村)

月三十一日送給の金一圓の裏に上は一枚紅の招待券(赤色)、五十錢以上に補助券(赤色)を贈呈し此の招待券が三百枚集まると富士五湖巡りが出来る、百枚で草津又は上林温泉行、六十枚で新鹿澤温泉行、廿五枚で上山田温泉行、廿五枚で別所温泉行、それ以下は大人は二枚子供は一枚にて市内の活動館、劇場の入場又は電車、バスに乗車する事が出来る」と云ふのである。然して電車、バス、活動等は七月十日の賣出し開始より十月二十日迄は通用期間と定め、旅行は九月二十日以降に於て自由に観光地や温泉郷に赴く事が出来る様になつてゐる。此の類例のない方法は非常な人氣を呼び既に數万枚を呈上し盡したとの事である。

上小生藤共同販賣二万貫 上小産蘭四
 万兩貫を巡り「特約取引」「蘭市場」の活
 戰場へ飛込んだ上小生藤販肺指振の共同
 販賣は縣下最初の産組系新戦術として各
 方面から注視され特約取引を不便の装
 置家及び蘭市場出荷に比較的不便の産蘭
 合理化として迎へられ又製絲家側からも
 仲買業者に依る口銭手数料の負擔を省い
 た上多量の原産蘭購入を極めて簡便にな
 りた点の原産蘭購入を極めて簡便にな

賣をなした。關女館を築きしむ。に東海村、共見、
豐里、和、鹽川、泉田、室賀の八ヶ村で、
販賣高は二萬三千八百八圓、買方製絲は錦
紡、カネタ、カネ元、丸興、笠原組で價
格は多少市場よりも上値であつた。

家畜飼料「壓搾糞」の發明 上田市市長
小藤蘆葉學校敎諭小山恵治氏（蠶一三）は
此種家畜飼料（牛に飼料）として「壓搾糞
糞」を發明し早くに各地農學校、農獵家
等より續々注文並に製造法の照會に接し
つゝあるが之は糞葉に較、食鹽、石灰、
糠、大豆粕、醬油粕、搗糠等を混合して
迄の實驗に依れば普通飼料の約五倍の効
力を有してゐると云ふ。

本會記事

本會日誌

七月八日 有志各位より母校へ注文せられし二十五周年記念アルバム發送す。
七月十七日 宮城千曲會長の電照に對し遠藤教授出張の件回答す。
七月二十二日 校内理事參集會館内へ設備すべき備品の件に付協議す。
七月二十七日 新潟縣南定所勤務の塚田卯平太氏(絲十)長逝せられしを以て弔電を發す。
七月三十日 有志を以て發起せられし早川先生へ贈呈すべき記念品資金募集狀發送す。

叙任辭令

舊職員の部
鹿兒島高等農林學校教授 北島 鐵雄
四級停年下賜
卒業生の部
六月十八日(滿洲國)
轉任國立柞蠶繭場技師 本間 國夫
敘任六等給九級俸
七月一日(滿洲國)
任國立柞蠶繭場技師 湯川 秀夫
敘任四等給四級俸
七月一日(滿洲國)
農事試驗場熊岳城分場 池田正五郎
技師員
養蠶科長ヲ命ス 正七位
敘從六位
公立實業學校教諭 齋藤 格次
年功加俸年額金百四拾四圓下賜
十二級停年下賜 地方農林技師 稻田 實
九級停年下賜 地方農林技師 高島 秀男
公立實業學校教諭 兼職ヲ免ス 荏田 恭一
公立實業學校教諭 兼職ヲ免ス 天田香三郎
七級停年下賜 地方農林技師 坂田 榮雄
八級停年下賜 同 金崎 眞英
十級停年下賜 同 依田寛之介
十一級停年下賜 同 芝 荒雄
八級停年下賜 同 小笠原安重
朝鮮公立實業學校教諭 補職山公立實業學校校長兼教諭 小野 修二
三重縣農林技師ニ任ス 軍砲兵少尉正八位
地方農林技師ニ任ス 高等官八等ヲ以テ待遇セラル 井出 滿藏
三重縣農林技師ニ補ス 公立實業學校教諭
八級停年下賜

支會通信

みすゞ會の實習生歡迎會

愛知縣毛織物検査所勤務の母校紡織科出身者をもつて組織するみすゞ會では七月四日夜一宮市敷島に於て名古屋地方の工場に校外實習に来れる紡織科二、三年生の歡迎會を開く。出席者は實習生七名、みすゞ會員十名の外に母校より出張の途中立寄れる小林荷一先生を加へ盛大な盛況を呈す。左に當日の出席氏名及寄せ書きを

(母校) 小林 荷一
(實習生) 福永 雄三 瀧澤 武通
柳澤 六平 柳澤 千治 本多 武通
金井 忠義 永井 千治 大谷 準人
(みすゞ會) 岡 豊次郎 鈴木 一郎
近藤 義信 藤井爲五郎 中川 正郎
村橋 義信 藤井爲五郎 中川 正郎
川久保 元 小野 啓助



遠藤教授歡迎の記

冷害續きの東北の天地にも本年は珍らしくも水銀柱が三十五度附近まで下せしめ酷暑に喘ぐ七月二十日日本縣養蠶實行組合指導員講習會に御講演の爲め遠藤教授には暑熱を冒して遙々御來駕になり旅の御疲労もなく何時もなごらぬ温顔に接し得たことは會員一同の此上なき喜びであつた。
會員に對しては電報にて會同を求めたが何分急のことであり又各自只今は多忙期にあるので會員出席率の悪かつたのは遺憾であつた。當日の出席者は
本間支會長 細村 貢氏
近藤正巳氏 藤井辰三郎氏
百瀬哲一氏 伊藤 力三氏
齋藤利雄氏 細川 謙氏
の八名に過ぎなかつた。
遠藤先生の歡迎の場所は仙臺を一時の内山に眺められる觀月亭を選ばれ、仙臺は誠に森の都の名に相應はしく森の間に點々する建築物は模範として現はれ一幅の油繪を見る感じを起らしめた。

時移るに従ひ宴も酣となり先生には久方ぶりに會した弟子共と全く無禮講の會員等の間に入り亂れ踊る場面迄到達する。歡喜は何時迄續くも明日先生の御講演の御苦勞の程を御察しし宴を閉づ。



湯川氏の滿洲國入り
鮮滿の同窓諸氏は勿論のこと、一度滿

洲國に足を踏み入れた程の蠶界人にして熊岳城に於ける湯川氏の存在を知らぬ者は無いであらう。否、そうした旅行者に非ざるも多少たりとも、外地蠶業に關する具限の士に對しては湯川氏の存在と云ふものは可成りに大きな映像を残して居るに違ひ無い。

滿洲の蠶絲業開發と云ふ命題は「内地蠶業を壓迫脅威する」と云ふ俗説のため放棄されて居る現在に於ても猶且つ好むと好まざるとに拘らず外地蠶業の將來と云ふことに對しては關心を怠る譯に行かぬとすれば湯川氏の存在と云ふことは日本蠶絲業界の北方の輝ける星である。

兎も角も滿鐵社内に蠶絲業に關する一分科を置き、滿洲の蠶絲業の行くべき方途を定め、滿洲の蠶絲業の行くべき方途にある養蠶科と云ふものゝ存在を認めしめたものは湯川氏であるから湯川氏の此處に於ける足跡は大きい。
然し湯川氏を語る上に於て蠶絲業の圈内許りから觀ることは正しく無い。湯川氏の視野と識見はその域外に超へても充分に羽翼を伸ばし得るもので交遊の廣きと抱容力の大きさに對してはたゞ「敬服の限りである」。

氏の透徹せる識見が蠶絲業界のみに踞踏するもので無い一例としては、奉天教育專門學校の廢止の如きかそれと廢止に到る内面の實情に關しては筆者が知る處に非ざるも氏の廢止論出で數ヶ月後に於て事實上の廢校となれる如きは將に好例と云ふべきである。

湯川氏は來滿以來既に十五年、謂はゞ氏にとりては第一期の仕事の終りと云へる。氏が今回被れて滿洲國々立柞蠶繭場々長に任用されたことは氏の從來の功績に對しては當然の褒賞であり、一面滿洲柞蠶業の將來に對する全面的の重責を氏の双肩に負はしたことになるのである。同窓として之は名譽のことであり誇りでもあり、一面滿洲國の柞蠶業の興隆と興るものと云はねばならぬ。

熊岳城から湯川氏を送ると云ふことは淋しい事ではある。それは長野から松村先生を東京に送つたときは同窓諸兄の心持と同じである。然し滿洲柞蠶業の全面的の追撃を目標とし母校同窓の飛躍的發展を謀る上からは忍ばねばならぬ苦慮である。

場の陣容を記すと次の如く全部上田關係である。
技師 湯川 秀夫氏
技師 本間 國夫氏
技師 赤沼 治男氏

御挨拶

拜啓時下大暑の折柄益々御清榮の段奉賀候
陳者小生十有五年間滿鐵熊岳城農事試驗場養蠶科に勤務中は公私共多量の御厚誼賜り鳴謝仕候
然る處今般滿洲國にて柞蠶繭場を開設致し柞蠶飼育部門の改善に着手致すことと相成り同國の招聘により轉出致候に就ては何卒今後共倍舊の御指導を仰ぎ援助を仰ぎ度此段不取敢御挨拶申上候 拜具
康徳三年七月二十三日
奉天省西豐縣城 國立柞蠶繭場 湯川 秀夫
(留守宅)連京線開原紅梅町)

御挨拶

謹啓時下炎暑の砌り益々御清祥の段奉賀候
陳者小生大同元年(昭和七年)滿洲建國勳功裡に職を實業部に奉じ爾來五年間大過なく今日に到り候事專に各位の御援助の賜り肝銘仕候然る處今般國立柞蠶繭場開設に伴ひ轉勤を命ぜられ候に就ては何卒今後共倍舊の御援助を仰ぎ指導仰ぎ度此段御挨拶申上候如斯候拜具
康徳三年七月二十三日
奉天省西豐縣城 國立柞蠶繭場 本間 國夫

謹啓、暑さ厳しく凌ぎ難く御座候折柄御機嫌如何に御座候や御伺申上候、折々御近情御たづね申上ぐべき筈の處慮外の御無音に打過ぎ候段幾重にも御容赦下され度候、尚時節柄御自愛專一に遊ばさる、様念上候 敬具
盛 夏
群馬縣多野郡美九里村三本木 高田 茂重 郎

